

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22510042

研究課題名（和文）環境政策史の確立及び日独の容器包装廃棄物政策に関する環境政策史研究

研究課題名（英文）Establishment of Environmental Policy History and Environmental Policy History of Packaging Waste Management in Germany and Japan

## 研究代表者

喜多川 進（KITAGAWA SUSUMU）

山梨大学・大学院医学工学総合研究部・講師

研究者番号：00313784

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず、環境政策に関する歴史的研究の動向を整理し、環境政策史が必要とされる背景を確認した。そして、環境政策の性格変容の解明をはじめとし、これまでの環境政策の実態を詳細に把握する環境政策史は、これからの環境政策を構想するうえでも有用であることを示した。さらに、発展した一方で分断化も進んだ環境経済学、環境政治学、環境法学、環境社会学といった環境政策に関わる諸学問を、環境政策史が架橋する可能性についても検討した。また、環境政策史は、都留重人や宮本憲一らによる日本の公害研究の流れを再発見し、発展させるものでもあることを示した。そのうえで、日独の容器包装廃棄物政策に関する環境政策史研究もおこなった。

研究成果の概要（英文）：This research serves as an introduction to this newly emerging area. First, the various currents of historical research on environmental policy are traced and the reasons why the development of environmental policy history as an area of academic inquiry is so necessary are substantiated. Second, the environmental policy history perspective is shown to be a useful tool for shaping the future of environmental policy because it provides a close examination of the realities influencing the environmental policy of the past, and it illuminates the transformation of environmental policy over time. Next, consideration is given to the potential for environmental policy history studies to serve as an intermediary between the rapidly emerging, yet increasingly fragmented, subdisciplines related to environmental policy studies, such as environmental economics, environmental politics, environmental law, and environmental sociology. In addition, the point is made that one aim of the field of environmental policy history in Japan is to rediscover the body of work known as "kogai" (pollution) research and encourage its further development. Also, this study elucidates the development and establishment of the packaging waste policy of Germany and Japan.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	400,000	120,000	520,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1400,000	420,000	1820,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：環境学、環境影響評価・環境政策

キーワード：環境政策史、環境政策、廃棄物政策、環境史、公害史、環境政策研究方法論、ドイツ

### 1. 研究開始当初の背景

これまで環境政策史という用語は、環境経済学、環境法といった講義の導入部において主要な法制度や政策を時系列的に説明する際などに用いられてきたにすぎなかった。しかし、あらためて環境政策を歴史的に研究するといった場合、環境政策分野の多くの研究者は、それは単に過去を掘り起こすだけの後ろ向きの作業であり、今後の政策および政策形成にどのような貢献ができるのか、歴史的研究というのは冗長な叙述がなされるだけで非理論的ではないのかといった印象を抱くかもしれない。

このように、これまでの環境政策研究において環境政策史が研究分野として考えられることはなく、環境政策研究における歴史研究のありようが語られることもほとんどなかった。一方、環境政策はすでに一定の歴史的蓄積を有しているため、環境政策史なるものは本来であれば歴史家によって議論されていても不思議ではないのだが、現代の政策をテーマとしない傾向にある多くの歴史研究者にとって、近年の環境政策は魅力的な研究対象となっていない。

### 2. 研究の目的

近年、環境政策の内容や運用の実際をめぐる研究がなされるようになったが、環境政策の成立・展開過程についての研究は少ない。しかし、環境政策の誕生背景、政策過程、その後の変遷を、政治的、社会的、経済的文脈のなかに位置付けて歴史的に研究することは、その政策の真髄をより明らかにし、今後の望ましい政策形成への指針を与える。そこで本研究では、第一に環境政策の展開を歴史的に考察する「環境政策史 (Environmental Policy History)」という新しい研究分野の確立をはかる。第二に、環境政策上の重要な責任原則である拡大生産者責任を生み出したドイツの容器包装廃棄物政策の事例を環境政策史アプローチにより考察する。さらに、容器包装廃棄物政策の来歴の日独比較もおこなう。

### 3. 研究の方法

本研究の方法である環境政策史自体が確立されてはいないため、まず、環境政策史の方法と有効性・課題を考察し、環境政策史の確立をはかる。この考察にあたっては、関連する環境史、日本の公害研究等の成果も踏まえる。この作業をふまえて、ドイツと日本の容器包装廃棄物政策を事例にした環境政策

史研究をおこなう。なお、ドイツの事例に関して、未公開公文書等の一次資料を利用することにより、政策決定過程を詳細に考察する。

### 4. 研究成果

環境政策史の確立に関する研究成果は、次のとおりである。まず、環境史、政策史、環境政治学、日本の公害研究における環境政策に関する歴史的研究の動向を検討し、環境政策史が必要とされる背景を解明した。そして、環境政策の性格変容の解明をはじめとし、これまでの環境政策の実態を詳細に把握する環境政策史は、これからの環境政策を構想するうえでも有用であることを示した。さらに、発展した一方で分断化も進んだ環境経済学、環境政治学、環境法学、環境社会学といった環境政策に関わる諸学問を、環境政策史が架橋する可能性も示した。すなわち、環境政策史は、学際的な学問である環境学の一つの方向性を示すものである。そのうえで、環境政策史は、都留重人・宮本憲一らによる日本の公害研究の成果を再発見し、発展させるものでもあると結論付けた。

一方、環境政策史アプローチによるケース・スタディの成果は、次のとおりである。

ドイツの容器包装廃棄物政策は、1991年6月に制定された容器包装令を核とする。容器包装廃棄物の発生抑制を目的としている容器包装令は、容器包装廃棄物の回収・分別の責任所在をそれまでの地方自治体から、容器包装の製造・販売などにかかわる事業者に移したことから、OECDによって新しい環境責任原則である拡大生産者責任 (Extended Producer Responsibility: EPR) のもっとも早い導入例とされる。そして、容器包装令はオーストリアやフランスといった欧州諸国のみならず日本にも影響を及ぼし、1995年制定の容器包装リサイクル法の契機にもなった。

容器包装令が1991年に制定され、そして、のちにEPRと称されるコンセプトが世界に先駆けてドイツで提唱されたことについては、とりわけ私たち日本人は、ドイツでは緑の党や環境保護団体が一定の勢力を有しているためであるといった漠然とした印象をもちやすい。しかし、この《先駆的》な容器包装廃棄物政策が、ヘルムート・コールを首班とする保守連立 (キリスト教民主同盟・キリスト教社会同盟・自由民主党) 政権において生み出された理由に関しては、これまで十分に研究されてこなかった。

そこで、本研究では、コール保守連立政権が、容器包装廃棄物政策を推進したのはなぜ

なのか、のちに拡大生産者責任と称されるようになった事業者にとって厳しいコンセプトを、意外なことに経済界自らが提案したのはなぜなのかという点を中心に考察した。

その結果、ドイツの容器包装廃棄物政策が、選挙での集票及びドイツ再統一等の政治的要因、廃棄物処理分野での民営化推進及びリサイクルビジネスの欧州での新規展開等の経済的要因を背景に進められたことを解明した。

本来、環境政策の推進は、政治的動機や経済的動機によって阻害されるケースが多々みられるが、このドイツの事例は、環境保護動機のみではなく政治的および経済的動機によって環境政策が推進される場合があり得ることを示している。すなわち、既成政党は、緑の党のように環境分野の政策課題であればすべて推進しているのではなく、自らの政治的利益や経済的利益にかかわる、あるいはそれらの利益との組み合わせが可能な環境政策を選択しているといえよう。

1960年代や1970年代には、既成政党や経済界が経済的要因から環境政策の推進に抵抗する傾向がみられ、環境政策の推進派と反対派の違いは明瞭であった。しかし、今日の環境問題にかかわるアクターを見回せば、かつてのように環境主義者、反環境主義者といった二項対立的理解が通用しないことは明らかである。今日では、環境政策は新しい市場を生み出すものとして、既成政党や企業にとっても魅力的なものへと変貌したことから、各アクターの立場が複雑化し、環境政策推進の理由を簡単には見出しにくくなっている。

環境政策が下からの突き上げに対する対症療法的対策を超えて、政治的および経済的利益をも生み出すものへと変容してきたという、より複雑な環境政策の全体像を理解するためには、あるアクターはいかなる政治的利益と経済的利益を環境政策に組み込もうとしているのかを冷静に見極める必要がある。その際に、環境政策史アプローチは重要な知見を提供するものである。

本研究の一連の成果が、国内外の書籍・学術雑誌に発表されたことにより、環境政策研究における環境政策史の重要性を提起できた。今後は、環境政策史の理論的検討のさらなる深化とともに、様々な事例に対する実証的な環境政策史研究が求められる。また、環境政策史研究の国際的なネットワーク構築も今後の重要な課題である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① 喜多川進 (2013) 「ドイツ環境政策にみる複雑さ」『ドイツ研究』第 47 号 (近刊)。(査読無し)
- ② 喜多川進 (2013) 「環境政策史研究の動向と可能性」『環境経済・政策研究』第 6 巻第 1 号, pp. 75-97. (査読有り)
- ③ 喜多川進 (2012) 「忘れられたリソースの再発見—歴史的視点から資源論の未来を構想する—」『科学』, Vol. 82, No. 4, pp. 463-464. (査読無し)
- ④ 喜多川進・佐藤圭一 (2012) 「環境経済・政策研究の新しい方向性は示されたか—環境経済・政策学会 2011 年大会に寄せて—」『財政と公共政策』第 34 巻第 1 号, pp. 110-113. (査読無し)
- ⑤ 喜多川進 (2012) 『ドイツ容器包装廃棄物政策史研究 1970-1991』京都大学博士学位論文 (論地環博第 6 号), pp. 1-212. (査読無し)
- ⑥ 喜多川進 (2010) 「ドイツ容器包装令の成立過程—1990 年上半期を中心に—」『共生社会システム研究』Vol. 4, No. 1, pp. 65-82. (査読有り)

[学会発表] (計 10 件)

- ① 喜多川進 「研究戦略としての環境政策史」環境経済・政策学会, 2012 年 9 月 15 日, 東北大学.
- ② Kazuhiro Ikeda, Keichi Satoh, Tomoyuki Tatsumi, Fumiya Fujihara, Anna Watanabe, Susumu Kitagawa, “Japan's climate change media coverage and politics,” The Second ISA (International Sociological Association) Forum of Sociology, August 3, 2012, Buenos Aires, Argentina.
- ③ 喜多川進 「ドイツ環境政策の複雑さを理解する—環境政策史アプローチによる問題提起—」日本ドイツ学会 (シンポジウムパネリスト), 2012 年 7 月 7 日, 東京大学.
- ④ Susumu Kitagawa, “Vision and Significance in Environmental Policy History,” The First Conference of East Asian Environmental History (EAEH2011), October 25, 2011, Taipei, Taiwan.
- ⑤ 喜多川進 「《環境先進国ドイツ》への転換—コール政権における環境政策の展開—」環境経済・政策学会, 2011 年 9 月 24 日, 長崎大学.
- ⑥ 喜多川進 「環境政策史研究の構想と意義」環境経済・政策学会, 2010 年 9 月 11 日, 名古屋大学.
- ⑦ Susumu Kitagawa, “Toward Environmental Policy History in Japan,” The 17th ISA World Congress of Sociology 2010, RC24 (Research Committee on Environment and Society), International Sociological

Association, Gothenburg, Sweden, July 15, 2010.

〔図書〕（計 4 件）

- ① Kitagawa, Susumu. (2013), “Vision and Significance in Environmental Policy History,” in Ts’ui-jung Liu (ed.), *Environmental History in East Asia: Interdisciplinary Perspectives*, London: Routledge, forthcoming. (査読有り)
- ② 喜多川進 (2013) 「ドイツ容器包装廃棄物政策に関する環境政策史的考察」寺尾忠能編『環境政策の形成過程—「開発と環境」の視点から—』日本貿易振興機構アジア経済研究所研究双書 No. 605, pp. 129-174. 総 204 ページ. (査読有り)
- ③ 喜多川進 (2010) 「ドイツ容器包装政令における拡大生産者責任—草案作成段階での政策手段の選択過程—」植田和弘・山川肇編『拡大生産者責任の環境経済学—循環型社会形成にむけて—』昭和堂, pp. 54-70. 総 327 ページ. (査読無し)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.js.yamanashi.ac.jp/~kitagawa/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

喜多川 進 (KITAGAWA SUSUMU)  
山梨大学・大学院医学工学総合研究部・  
講師  
研究者番号：00313784

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし